

眞の復讐

自他ともに

乙「どうしました。あなたの顔には、眉の間に一本の暗い線が見える。」

甲「先生、私の心は暗いのです。今日まで何を聞いていたのでしょうか。何もかもわかりません。仕事も手につきません。人生もこれまでであったような気がします。何のために生きているのでしょうか。」

丙「先生、この人は近頃、親しい友人が病気で、手術を受けてすぐ死んだのです。そしてこの人もまた病気があるのです。そのために死を考えはじめたのです。それのために暗くなっているのです。うんと話してやって下さい。」

乙「なるほど、ご主人は気の毒なことでした。あれほどのことに出会って目がさめねばさめる時はありません。ご主人を犬死にさせてはなりません。あなたが生きてすべては生きてきます。それで、あなたは今殺した男に対して、どんな感じを持っていますか。」

甲「憎くて憎くてたまりません。残念でなりません。」

乙「この前にもそのとおり聞きました。無理ありません。僅かな言いがかりで殺されて、相手が、六年か七年の監獄では、残念なものも無理はありません。昔だったら、仇討ちというところですね。だが考えてみようではないか。」

甲「今もその心です、たまらない心です。」

乙「しかしその心によつて救われるだろうか。そしてまた、ご主人も浮かばれるだろうか。生きるだろうか。法然上人の父君は、敵のために討たれて臨終にあたって、法然上人にむかつて『汝が仇討をすれば、その子がまた、お前を仇だと思つてねらい、やがて、汝の子がまた仇討をする。そうしたことを繰返したのでは末恐ろしいことである。それよりも、汝は汝の救われる世界に歩んでくれ、出家してくれ。』と遺言せられた。そこで出家して、自らの救われる道を歩まれたが、そのために浄土門の教が開かれて、幾百年の間に、億々の衆生が救われました。」

あなたのは心は、今恐るべき道を歩もうとしているではないか。その心をじつと凝視すべきであります。それでは自他ともに亡びます。」

人間は勝手なものだ

甲「私の心は、どうして本気で聞いてくれないのでしょうか。」

乙「お待ちなさい。いったいご主人を殺したのはだれなのでしょうか。」

甲「それは△△です。」

乙「それはいちおうそうです。けれども、もっと深く考えて見ようではないか。私は、ご主人を殺したのはあなただと思ふ。」

甲「えっ！ 私ですって？」

乙「そうです。ご主人を殺したのはあなたです。」

甲「それはまた、どうしてでしょう。」

乙「今の商売は、あなたが初めたのですか、ご主人の発案でしたか。」

甲「それは私ですけれども、私が殺したとは思われません。」

乙「今の商売をしていないでも殺されたでしょうか、この広い町に、外にも家はたくさんあるのに、それなのに、あなたの主人のみが殺されたのです。しかもその商売をしているがゆえに。」

まだわかりませんか。その海に、鯛が二尾遊んでいました。牝の鯛が、牡の鯛にむかつて、こちらに行こうと、いやがるのを無理に誘いました。そして二匹が泳いでいると、そこに網がはつてありました。二匹が、何もかも忘れて、楽しんでいる時、つい誤って、牡の鯛は網にまきとられてしまいました。牝はすばやく身をかわしたので助かったが、牡はそれから網を一生懸命呪いはじめました。」

甲「先生は、私をその牝の魚だと言われるのですか……………」

乙「考えても、納得できないか。それでは問います。あなたの一生のでき事で何がちばん大事でしたか。」

甲「それは主人の死でありました。」

乙「それほど大事、一世一代の大事をもあなたは、あなたの責任外におくのですか。それでは主人にわびる心もないであろう。主人に死なれてみて、あなたの生き方は主人に対して十分であり、立派であつたであろうか。」

甲「いいえ、死なれてみると悪いことばかりでした。相済まぬことばかりでした。」

乙「それなのに、ご主人の変死に対しては、あなたはわびないのですか。」

甲「……………そうですね。」

乙「網も悪いだろう。しかし網につれて行つたのはだれなのだ。この広い□□で、ご主人一人をそんな立場においたことについてあなたには責任はないのか。」

人間は勝手なものだ。もし、あなたのふた従兄の子くらいの遠縁の者でも、もし出世して博士になつた、次官にでもなつてここへ帰つて来るとなると、あなたはきつと、それを自分の名譽にしようとするに違いない。あるいは、あの人があんなになつたのは、自分がある時、こんなになつて聞かせたのがもとだとか、何とか、少しでも因縁をつけて、自分のひれにしようとするに違いない。よいことならば、つごうのいいことならば、何でもそれを自分のものにし、悪いことならば、一世一代の大事でも、責任はないと言いはる……………いや、人間の欲心は勝手なものだ。」

甲「間違つていました。何という勝手な心でしょう。」

菩薩のみこころは

乙「あなたの心は、一世一代、ご主人の死すら、その責任を背負うまいとする。しかるに、法蔵菩薩は十方衆生一切の業苦煩惱を、ご自身の責任と感し、衆生の苦悩を、大悲の内容とし、十方衆生往生せずばわれも正覚ならじ、と誓つておられる。たとい身をいかなる苦毒の中におくとも、一切群生済度の大願大行のためには、精進また精進、忍んでついに悔いない。これがすなわち菩薩の大慈悲であります。衆生の欲心は、一切衆生を下敷にしても己一人の幸福を得ようとし、つごうのいいことだ

けはひきとつて、つごうの悪いことは、自分の当然の責任をも引き受けまいとする。菩薩の心にふれて、あなたは何と申します。一切衆生を荷負して、一切衆生の底に忍終不悔する菩薩の心、その前に、あなたは自己を清算すべきではありませんか。」

甲「……………」

真の復讐

乙「あなたは死におびえているという。墓場の向うまで、その呪いを持って行く気であるか。そしてそれが夫に忠実だと思うか。夫を生かす道だと思うのか。その真つ暗になつて、人生を厭い、悲観している生活が夫を犬死させていることに気づかぬのであるか。また、そのあなたの相が復讐だと思つているのであるか。何ゆえにもつと正しい仇討をしないのか。」

甲「えっ！」

乙「もしあなたが如来を親とするわれわれの同胞ならば、刃に向うに刃をもつてすることは許されない。怒りに向かうに怒りをもつてすることは真の復讐ではない。聖者も復讐する。しかしそれは、相手が自分の一切を投げ出して救われること、相手がその真実に動かされて、正しく生きた時、ほんとうの復讐がなされたのだ。夫を殺した男が自己の業障に覚め、大悲の前に合掌して無上正真道を志求した時、あなたは勝つた時なのだ。たとい、この世ではそれが成就しないにしたところで、百千万億無量の後の世でも、それを成就せしめるようなあなたの今日の生き方があるはずだ。聖人の「念仏申すのみぞ未通りたる大慈悲」と仰せられた世界があるではないか。聞けば、その男は、刑務所の中から、働きためた金を寺に送つてご主人のために読経してもらうように言つて来たというではないか。彼の中にも、すでに人間らしい心、無上菩提への序曲は奏せられているではないか。罪を悪んで人を悪まざとか、ほんとの善人もいないように、真底の悪人がいるものではない。あなた一人にひしひしとせまる覚めよ覚めよ縁も、あなたを廻心せしめることはできないのか。無視することのできない久遠の真実の前に、救い上げずばおかないという真実の前に、あなたはどうすればいいのか。」

甲「先生！ 間違つていました。悪うございました。夫は善知識だったのでございませう。何という私の恐しい心でございませう。」

乙「一切を滅ぼさないとはおかない瞋恚、その根底に横たわる貪欲、その底の愚痴、おそるべき毒蛇が、腹底にどくろを巻いているのが見えましたか。」

甲「恐ろしい心です。ああこれ（合掌）だけです。この恐るべき心こそ、大悲の本願をおこさせた心です。」

乙「そうです。南無阿弥陀仏は、しかし、その煩惱の中にのみ生きたまうのです。」

甲「ありがとうございます。ああうれしい。信心じゃ安心じゃといらぬ世話していただきました。やれやれお恥ずかしい。不思議に肩が軽くなりました。ああこれまでと思つていましたが、これからでした。これから生きさせていただきます。」

乙「そうです。お念仏の中に今の商売をお続けなさい。どんなに六字のおはたらきが
現われて下さるかわかりません。」